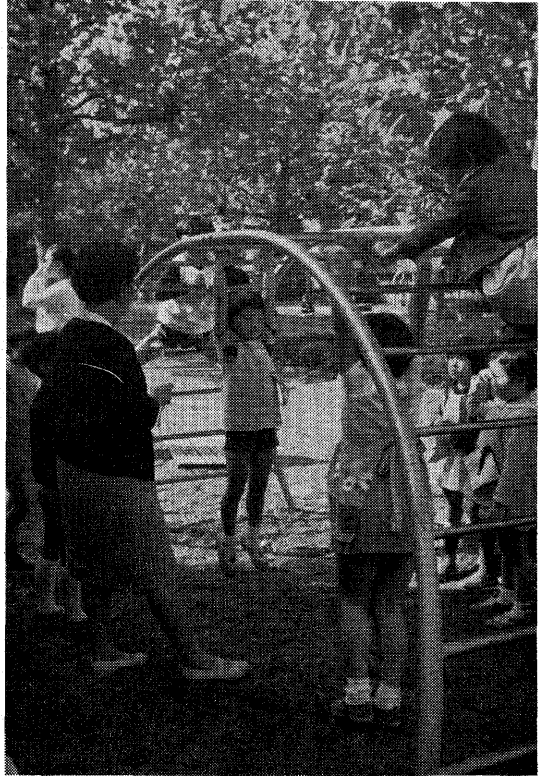


幼児の感情(二)

〔B〕

ものとの間にみられる子どももの感情

幼稚園で、子どもは、ブランコ、すべり台のような遊具施設と
呼ばれるようなもの、やクレヨン、はさみ、あき箱など教材と呼ば
れる有形なものから、製作、音楽、文字など文化と呼ばれるもの、
ひいては価値などという無形なものに至るまでのさまざまなもの
に接しています。これらのものとの間にみられる感情をとらえて
みます。



1 ものは個々の子どももの感情の接点となる

①一つのものに多くの子どもが注目するとき、そこで他
人の感情、考え方を知る機会を得る。(写真①)

子どもの抱く感情は、ほぼ似ているとみることができると
同時に、個々の子どもが、それぞれに異なった体験をして
いることから、そこには、微妙な差異があると考えられる。
子どもが集まっているところでは、平均的な考え方、感じ
方を知ると同時に、自分とはちがう考え方、感じ方がある

佐藤満寿美

2 感情のはけ口としてのもの

①人によつてけられないような感情のはけ口を積極的にも、に求める。

製作することも、歌をうたうこともみな、感情のはけ口になる。遊びの中で、つみきの家をこわしたり、棒で草を力まかせにうったりするような破壊的、攻撃的な行動となる。



写真①

るのだ、ということに気づく機会が与えられる。

②ものは、子どものまちな感情を結びつけ、方向づける役割もある。(写真②)



写真③

て現われる場合もあるし、砂場で穴を掘りつづけるような行動になつて現われる場合もある。



写真②

② 所在ない気持、どうしていいかわからない気持を、ものへの消極的な対し方で、うめあわせる。(写真③)

意欲的な活動を飛跳と考えるなら、その間と。まり。木となるものも必要である。

③ やりとげようとする気持どもの

子どもは、成熟するにつれ、製作などの一連の活動に長時間意欲を集中できるようになる。ものに対して意欲を起し、ものの出来ばえが、意欲を高揚し、製作意欲を長時間にわたって持続させる。そしてやり遂げたときに体験する成就感、満足感が、次の活動までの意欲を持続させる。

(写真④の説明) 五歳のSは、段ボールの箱を二つも重ね



写真④

て大きなキリンを二日間にわたって製作している。製作中、友だちの賞讃や協力、先生の製作方法の助力や賞讃を受け、それがやり遂げようとする意欲を助

長していると考えられる。

④ 満足感と製作の態度

仕事、製作をやり遂げたときに抱く満足感は、その過程が困難なほど、深く印象づけられる。この経験が、困難な仕事を乗り越えようとする意欲につながる。

(写真の説明)

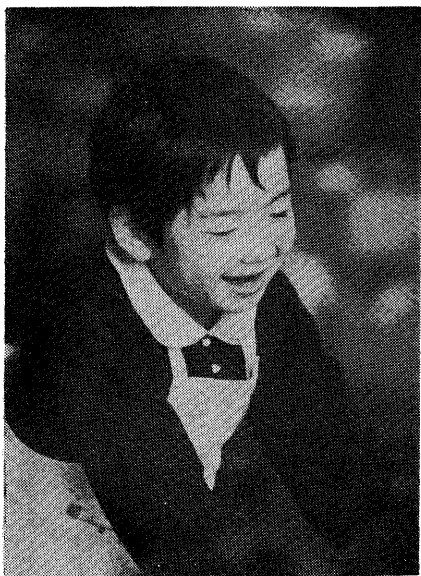
つたの茎に紙をはってウサギを作る。(写真⑤) さらに針金でバネを作ろうとした。バネがうまくつかず、長い間苦心する。(写真⑥) あとの満足感は大きかった。(写真⑦)

⑤ 表現意欲どもの

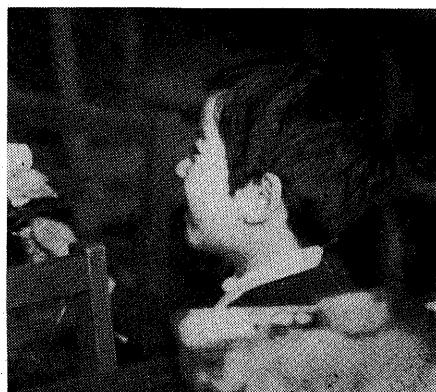
子どもの表現したい気持が、ピアノをひいたり、立体的な



写真⑤



写真⑦

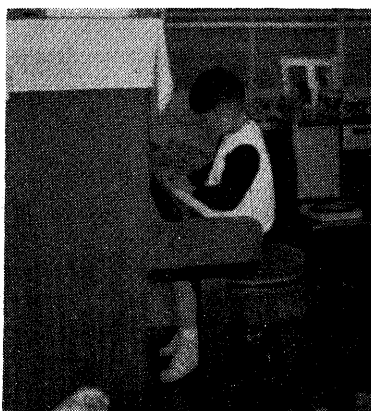


写真⑥

ものを作ったりする活動を生み出している。この場合、ピアノ、クレヨン、紙、箱、セロテープなどが、その意欲をうけとめてくれる物となる。子どもの欲望を満たし、さらに活動を促進する教材が、いつも子どものまわりに準備されていないけれ



写真⑨



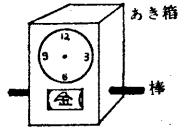
写真⑧

ばならない。

⑥探究心と文字への態度

探究心をもつてものに接することからはじまり、没頭することですらに新しい経験をする。

(例) 五歳児のクラスでは、多くの子どもが時計を作っていた。Aは、友だちが時計を作っているのを見て、うちに自分でも作りたくなる。



すでに他の子どもが作った曜日の出る時計に
気づき、Aもそれを作ろうとする。あき箱に
文字盤をつけ、数字を書き、その下をくりぬ
き、棒をまわすと曜日が変わる時計である。

数字はわけなく書けたが、漢字はよくわからないらしい。
手本の時計の棒をまわし、形のちがう漢字を出して席に
もどっては書くこと七回。先生がそばを通りかかっても
決して尋ねようとはしない。曜日を表わす漢字は、形こ
そ同じであるが、順序不同である。

時計作りの過程で文字（数字と漢字）に接する機会を得
た。「月」「水」「金」という漢字が曜日を表わす漢字であるこ
とは、既に目にしていて経験からわかっているらしいが、
どの字が何曜日を表わすのかは、まだわからないようであ
る。漢字の形を知りたいという探究心が、手本をまねて書
くという活動に集中させたと思われる。どの字が何曜日を
さすのかがわからなくても、その漢字を一通り書いたとい
う経験は、この子どもにとって重大なことである。次に字
の形と、その字のもつ意味が一致する時がくる。

⑦競争心や対抗心とものへの態度

（写真の説明⑩）

向こう側で作られたつある作品は、Sが作りかけたキリン



写真⑩

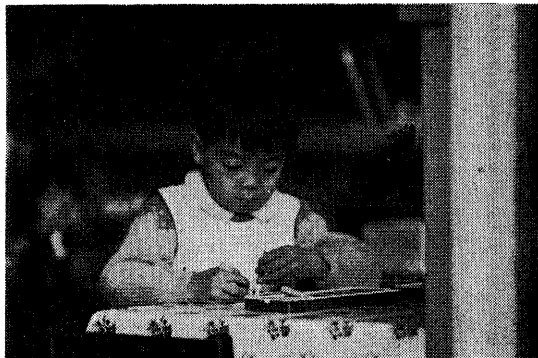
である。その首のつけ根をおさえている子どもは「わあ、
Sちゃんうまいな、ぼくも入れて!」といってSの製作に
途中から加わった。箱に手をさしこんでいる子どもは、S
の作品をみたとき、先生に「ぼくにも箱ちょうだい!」と
いった。そして、新たに作りはじめた。Sの作品が二日か
かって完成したのにひきかえ、対抗的に作られ出した手前
の作品は完成しなかった。

3 ものと感情の相互作用

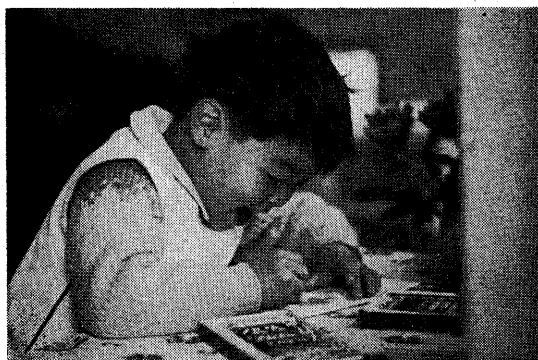
ものへの興味が、子どもに働きかけをさせる。働きかけに
よってものに変化が起きる。この変化が子どもの感情に作

ものに対する子どもの見とおし

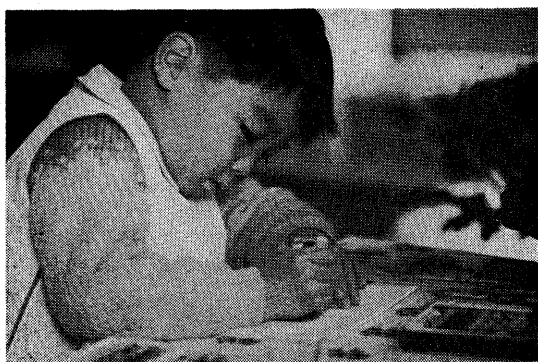
前に述べたことを換言するならば、子どもは、その時そこで感情によって製作態度がかわり、製作することによ



写真⑪ クレヨンの2色の色をまぜてみようと思いたつ。



写真⑫ 新しい色ができることがわかる。これはおもしろいことだと気がつく。



写真⑬ もっと多くの色を一度にぬりあわせようと思いたつ。どうなるのかという気持。

用し、次の働きかけを刺激する。製作などの一連の過程には、このようなものと感情の循環的な作用が考えられる。

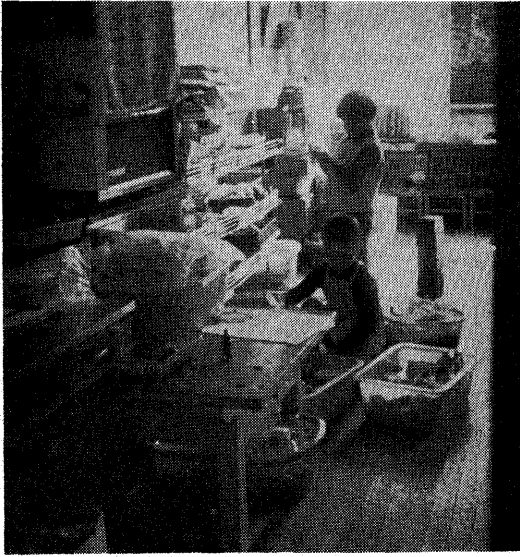
(写真⑪、写真⑫、写真⑬)

り、その時そこである感情をいだけ。瞬間ごとの相互作用の結果として、一連の意味をもつ活動が観察されると思われる。

では、幼児の活動は、その時その場の規定だけによるのだろうか。我々おとなは、ある程度先のことを予測して行動できる。これは過去の多くの経験の積み重ねから将来を推察する能力を得たのである。子どもも、程度こそちがうが、

5 活動の発端となるもの

先を見とおして、行動できると思われる。比較的経験が少なく将来への推察が疎なために予測どおりかかない場合がおとなに比べ多いのだと思われる。また、表現能力の未熟などが見とおしを裏切る結果となる場合もある。



写真⑭

手持無沙汰でやることがないと、活動のきっかけを探し出す。探し得たものによって次の活動は、より高められる場合

もありより、高められない場合もある。ほしいと思つて探していたものが見つかった場合や、興味を与えるかわつた形のもの、珍しいものに会つたとき、活動はより促進される。

(写真⑭の説明)

朝、幼稚園に来るとまず、材料だなの前へきて、あき箱に、おもしろい形のものはないか、かわつた材料はないかと探しはじめた子どもたちである。

偶然に手にした材料から、作りたいものが決まる場合が多く見られる。製作の目標をもってふさわしい材料を選んでいる場合もある。また、もとの出会いでそれまでもつていた興味が一瞬にしかわつてしまふ場合もある。よき教材、素材の準備が子どもの発達を促進すると思われる。

〔C〕 保育者と子どもの間にみられる感情

〔A〕〔B〕にひき続き〔C〕としては、保育者と子どもの間にみられる感情をとらえてみました。観察をとおして、さまざま感情が生起していることがわかりまして、ここでは、少し述べ方をかえ、特に、子どもの感情をとらえ、その発達をうながす保育者の態度について述べてみようと思ひます。

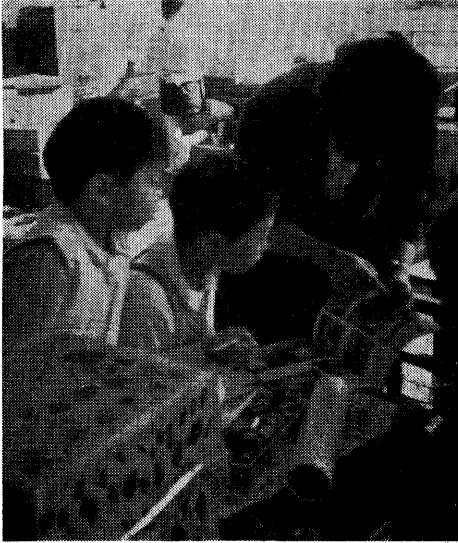


写真 ⑬

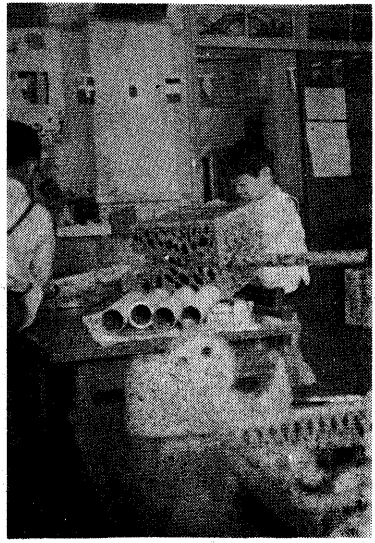


写真 ⑭

1 得意な気持の承認

(例) 「先生、これなんだかわかる？ おまわりさんの台よ」と子どもがいう。先生はそれをうけ「ピッピ」とやるのね、とまれ！ すすめ！」と身ぶりを加えて言いかえる。子どもは、台を作った得意な気持が承認される。

2 アイディアの提供と探究心と製作意欲

(例) キリン作りをしている子どもは、足にする筒に灰色のマジックで色をつけていた。これに気づいた先生は「足も黄色のほうがいいのではないかしら？」といいながら、キリンの写真の載っている絵本を持って来て、それを示しながら「ほら、キリンは足も黄色で、点々の模様がついているでしょう」と言う。子どもはのぞき込むようにしてそれを見る。探究心をそそられ、そこで得た新しい知識をもって再び製作に意欲的にとりくむことができる。(写真 ⑬)

3 連帯感を強める動機づけ

(例) 帰り時間が近づいて、後かたづけをはじめ。机のところで組み積み木がなかなかはずれないで、苦労している男子に気づいた先生は「広い床の方へいってみてごらんなきい」と指示する。そこには子どもが四、五人いてこれと同種の積み木をかたづけている。ここで、力を合わせてやるとぬけるのではないかという考えが、子どもの中に起これ

ば、無理なく協力の態勢が生まれる状態である。果たして子どもたちは力を合わせてやることに気づく。協力によって積み木はぬけ、子どもらの満足感、成就感は連帯感を生み、強めた。

4 獨立心、ひとりてやろうとする意欲をのばすような提案

(例) 製作意欲を助長するにはある程度の手助けはいる。が、やり方の指示が命令口調だったり、子どもにとって程度が高すぎたり、子どもが理解するひまのない程先継早だったりすると、子どもの自主性、獨立心をそこなってしまう。「こうしなさい」と命令するかわりに「そうね、どうしたらいいかしらね」といっしょに考えたり「こうやってもいいわね」と提案するにとどめ、子どもの自発性を待つことが望ましい。

5 子どもがやりたいと思つてゐることを保育者が改めて言いなおすとき、子どもの自己認識、製作意欲、自尊心の助長をうながす。

(例) ョットを製作しているとき、突然「先生、こぐの作るの」といった子どもに先生は向き直り「あらオールね、いいわね」と答えた。子どもは満足そうにオールを作っていた。子どもの言葉をとらえ、その意をくんで保育者が言い直すとき、子どもは助長されるのであり、意をくみとれない

ままに、なまじ、保育者が決めつけてしまうのは逆効果となる。

6 子どもの良い面を、みんなの前でとりあげることは、自信を増す。

(例) 机のまわりに八人の子どもが絵を描いている。花や人やお日様を描いた絵の多い中で『ジャックとまめの木』の絵だといつて描いている子どもがいる。先生はこの子どもに気づくと、描いている絵の説明をきき、その上で「そうEちゃん

の絵いいわね『ジャックとまめの木』の絵ですつて、まめの木がずっと空までのびているじゃない」と他の子どもに聞こえるように言う。まわりの子どもはこの子どもの絵に注目する。その後、この子どもは熱心に絵を描いた。まわりの子どもが席を立っても一人で描いていた。

良い面をみなの前でとりあげることは、その子ども自信を増すと同時に、他の子どもへの良き刺激ともなる。

子どもの感情は、子どもの生活全般に関係し、生活をささえる重要なものであると考えられます。また、同時に、その生活の中の経験が感情を豊かな複雑なものとして発達させる機会を与えていると考えられます。